

平成29年度校友会奨学生 最終成果報告会資料

作品が作品として配慮される最初の場としての展示空間とそこにおける作品存在の行方
—ハイデッガー『芸術作品の根源』に基づく 存在論を手掛かりとして—

Exhibition space as the first place where the work is considered as an artwork and the whereabouts of the work at there
— Based on Heidegger's “*Der Ursprung des Kunstwerkes*” ontology as the Clue —

多摩美術大学大学院 博士後期課程 2年

梶谷 令

Ryo Kajitani



多摩美術大学校友会



- 応募研究概要 「展示空間における存在論」-

真理がそれ自身を- 作品の- 内へと- 据えること [das Sich-ins-Werk-Setzen]

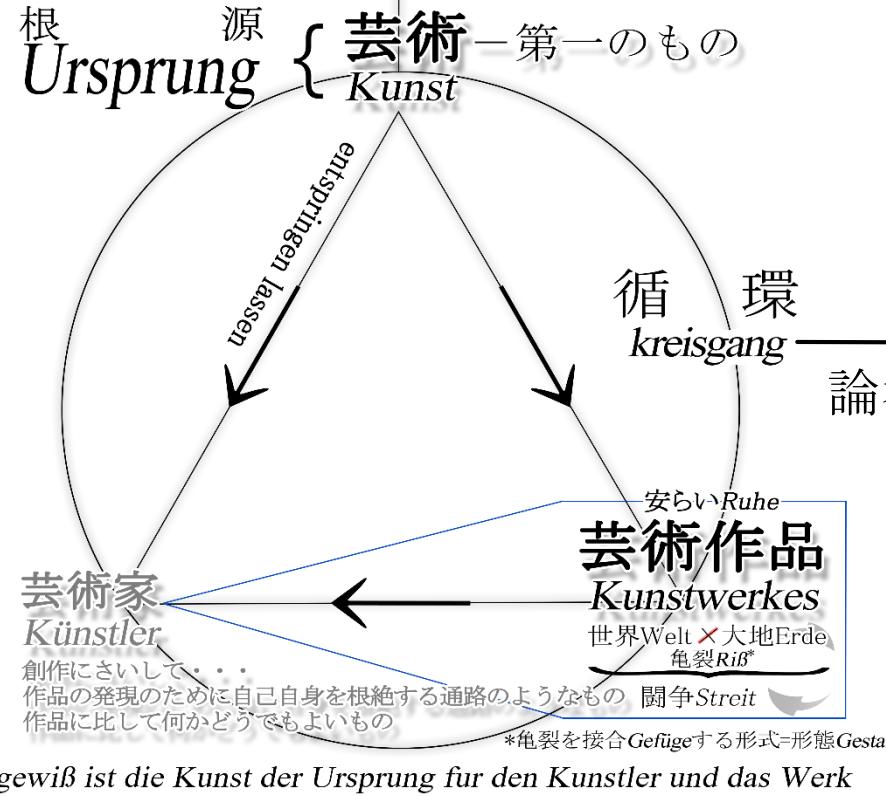


Figure 4-7 『芸術作品の根源』における芸術・芸術家・芸術作品の基礎的布置と相關
(Der Kuenstler ist der Ursprung des Werkes. Das Werk ist der Ursprung des Kuenstlers.)

『芸術作品の根源』における存在論の枠組み*1
(拙著論文p.88より引用)

*1 Martin Heidegger. "Der Ursprung des Kunstwerkes", (Reclam, 1960)

*1 Martin Heidegger. "Gesamtausgabe: Holzwege 1935-1946", (Verlag Vittorio Klosterman, 2003)

マルテン・ハイデッガー (Martin Heidegger, 1889-1976)

芸術を仮借した存在論 (Ontologie) を確立した一人
その代表的テキストが...

『芸術作品の根源』 "Der Ursprung des Kunstwerkes" (1960)

芸術・芸術家・芸術作品
存在論(的美学)の仮借的フレーム

各フレームに制作者として内部所属。
皮膚感覚で差異を取得可能

作者・作品・鑑賞者

近代美学における「狭義の芸術過程*2」のフレーム

制作・展示実践による制作者特有の概念把握の手続き
(Project Based Research)

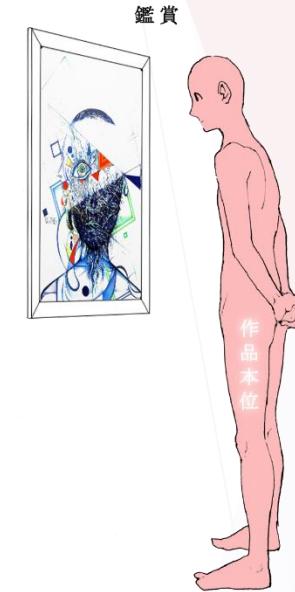
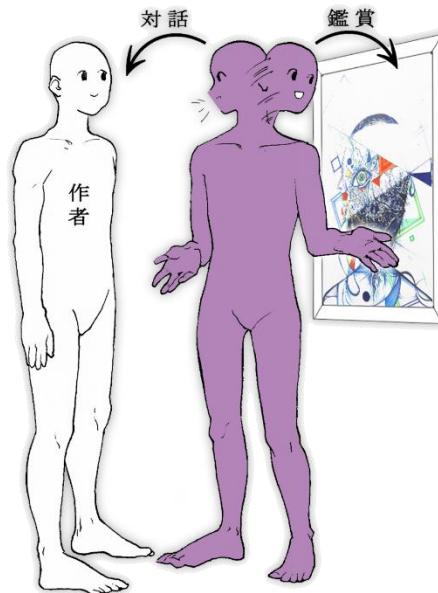
*2 深沼圭司『制作について 模倣、表現、そして引用』(水声社 2016年) pp.35-36

近代美学における鑑賞者像の凡例 (ハイデッガーの思想圏においては超克の対象)

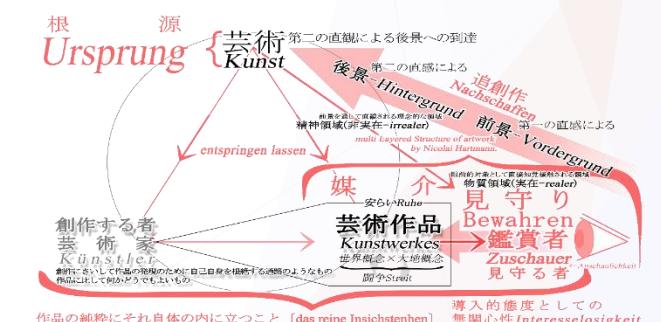
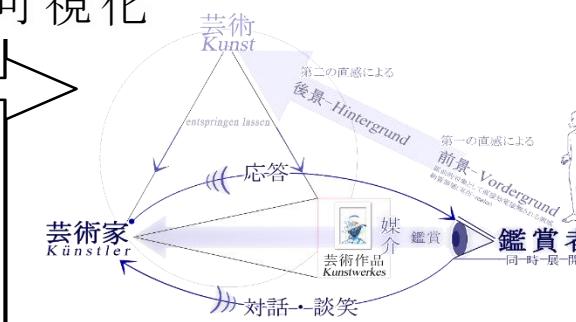
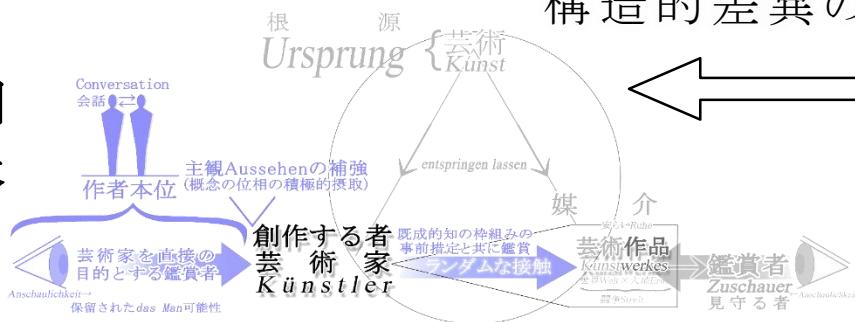
具体



ハイデッガー存在論における鑑賞者像:見守る者たち die Bewahrenden



構造的差異の可視化



存在論(的美学)を出発点とする複数の鑑賞者モデルのサンプル (拙著論文p.121より引用)



- 奨学金による成果 ① 初個展の実施 -

① 「個展」の実施

Supported by The alumni association of Tama Art University



Ryo Kajitani Solo Exhibition
梶谷 令 個展 2017.8.21 (月) - 8.26 (土)

鉛筆素描(ドローイング)

油性木版画

デジタルペイント.etc

GALERIE SIMON

ギャルリー志門

〒104-0061 東京都中央区銀座6-13-7 新保ビル3F
Tel:03-3541-2511 Fax:03-3541-2512
g-simon@bu.ij4u.or.jp <http://g-simon.com/>

GALERIE SIMON
3rd FLR. SHINBO BLDG.
6-13-7 GINZA CHUO-KU TOKYO JAPAN 104-0061
+81-3-3541-2511

料金別納
郵便

Ryo Kajitani Solo Exhibition
梶谷 令 個展 2017.8.21 (月) - 8.26 (土)
11:00-19:00(最終日 17:00迄)



後援: 多摩美術大学校友会

GALERIE SIMON

ギャルリー志門

〒104-0061 東京都中央区銀座6-13-7 新保ビル3F
Tel:03-3541-2511 Fax:03-3541-2512
g-simon@bu.ij4u.or.jp <http://g-simon.com/>

GALERIE SIMON
3rd FLR. SHINBO BLDG.
6-13-7 GINZA CHUO-KU TOKYO JAPAN 104-0061
+81-3-3541-2511

【アクセス】 東京メトロ・日比谷線/銀座線A3出口 徒歩5分
東京メトロ・日比谷線、都営地下鉄/東銀座駅A1出口 徒歩2分
JR/有楽町駅 銀座方面出口 徒歩10分



《TRICKSTER》

(D2博士制作-2017) 油性木版画(凸版)

62.5 × 91.5cm

一般財団法人守谷育英会第25回修学奨励賞



- 奨学金による成果 ① 初個展の実施 -



① 「個展」の実施 2017年 8月21日(月)～26日(土)

第1回ギャルリー志門University Selection企画 Vol. 2 多摩美術大学大学院*
(ギャルリー志門及び、多摩美術大学校友会 助成による*)

〒104-0061 東京都中央区銀座6-13-7新保ビル3F

2017年 8月21日(月)～26日(土)

11:00～19:00(最終日は17:00まで)

*画廊使用料28万→14万に減額

展示内訳

ー作品ー

版画 8点 (62.5×91.5cm～70×100cmサイズ7点、A4サイズ1点)

鉛筆素描 10点 (B1規格サイズ1点、B3規格サイズ8点、B4規格サイズ1点)

ジクレー 1点 (A4規格サイズ1点)

総数 19点

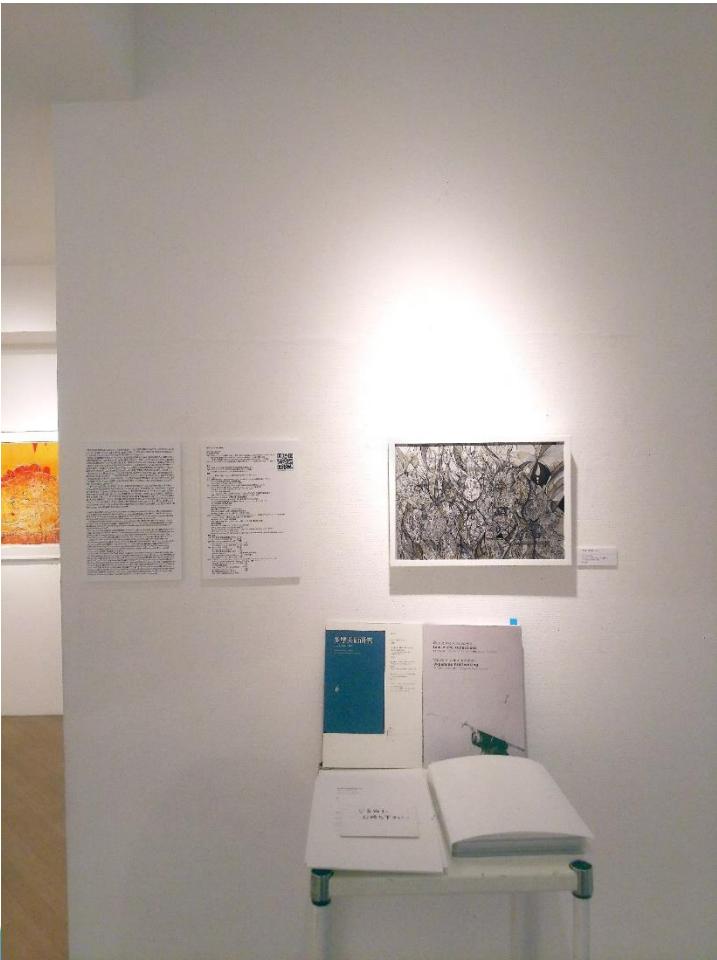
ー他ー

大学院研究紀要『多摩美術研究第6号』 40冊 (抜き刷りを含む)

↑ 展示会場入口すぐの様子。第19回多摩美術大学校友会小品展2016でチャレンジ賞を頂いた作品を展示。同壁面上に、キプロスのHambis PrintmakingMuseumで展示した版画1点とカタログを併設。元々寄贈扱いであったが、個展のために作品が帰国して間もなく、初個展でも披露の機会に恵まれた。



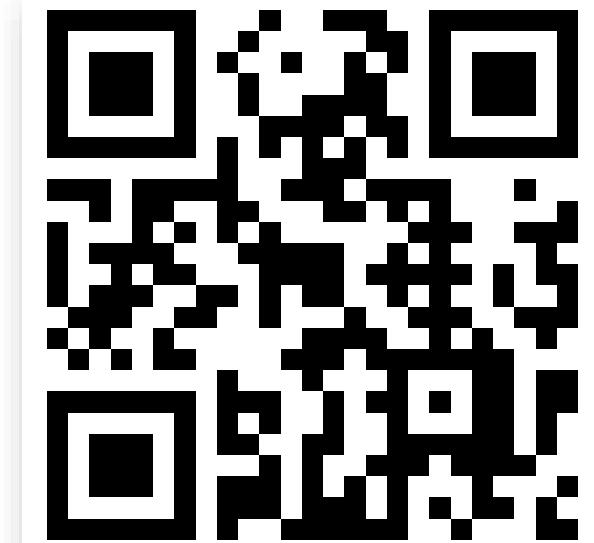
- 奨学金による成果 ① 初個展の実施 -



① 「個展」の実施 2017年8月21日(月)～26日(土)

- 展示空間での試み -

- ・論文誌配布による活動の可視化及び議論の促進・課題の共有
- ・QRコードによるwebアクセスの簡素化及び交流の促進



↑ 展示会場入口すぐの様子。第19回多摩美術大学校友会小品展2016でチャレンジ賞受賞作品を展示。併せて、博士課程1本目の査読論文(修士論文を改めたもの)を収録した「多摩美術研究第6号」を会場に配置し、延べ30人以上の来場者にお持ち帰り頂いた。



— 奨学金による成果 ② 個展以降 —

② 展示・研究活動の「見える化（可視化）」の促進

– WWW 上での試み –

Curriculum Vitaeをスクロールしていくと研究の要約が時系列に参照できるよう配慮。配信言語は日・英・一部ドイツ語。校友会の助成を受けたイベントは、ひと目で分かるように可視化し、リンクを振った。

「ナウトヒル」にして、西野アーティストは、私はアーティストになりたい、いわく「ナウトヒル」が「ナウトヒル」で、ナウトヒルがナウトヒルであります。理論と実践をつなぐ歩みから、私は今までこれからも、自分が芸術家としても芸術家としても考え、誰かの制作者としてこれまでに立てて立てる所を学びました。原点とすると制作行為は、あるから拘るプロセスを学ぶ、試験的に判断する手順に繋がっていました。これを真なる視点から見ると「前進」、或いは「流れ」であったわけです。

ハイデッガーは「芸術作品の根源」において、偉大な芸術作品からすれば、芸術家は作品に対して何かどうでもよいもの、自己自身を根柢する意味のよきものと述べます。つまり作品が第一のものであり、作者は背後へ撤退します。私は断じて芸術家ではありませんが、制作者としての自己として、ハイデッガーの考へる作品・制作行為の伴たる限りなく、云々流れの原始的感覚を以って理解してきました。これとひとくわり象徴する豊臣頼長は「豊臣の顔」であり、ここにおいて制作行為が単純化、同時に、描画者として展示・展示することにたなはだらぬ尊重を意味します。制作者としての私の尊重者と同様の平等を許すことによる、その実際的な前進にはがんばりはありません。つまり、既に完成した作品から離れる、制作行為の屈曲の前進によって、限られた時間の中で、未だ見ぬ視野に挑みかかること—それが在るか無きかの存在の根源を照らす道筋になると信じています。根柢的な豊臣頼長、それを超越するこの私の歩みです。

Based on the author's background with isolation and retreat, his personal exhibition is the first attempt to raise a question of withdrawal. Withdrawal from human relationships, from artwork, from knowledge and eventually from himself. Especially a withdrawal from the complicated human relations seemed extremely confusing, but wandering with his pencil on a paper he created a lot of work on that...

Printmaking replicates the post development of pencil drawings. Imagine that pencil drawing is a forest, and printmaking will go for a meadow. Pencil lines are about accumulation, whereas printmaking is sharp and close to purification. After playing with dense line drawings, I realized that nothing is that hard for myself to resist as "Face". "Face" seemed to be watching over happenings or from time to time playing the role of related purification while flickering a shadow of a monster. In other words, its target is not fear, it exists as historic remains that quietly watch over people who have overcome their relationships crossing the absurd mountains. That "Face" is like a gift. This artwork here is an "amulet" and "talisman", it is a trace of those who watch over.

Even as an academic research, the first step started with the overcoming pedantic manners and the revelatory announcement called "I know nothing" by the end of wandering the beach of intelligence. From the theory and through the process of production, from now on I have learned to stand here as a creator, without thinking of myself as an artist or a painter. Looking back at the production, it is related to the procedure of making a diagnosis for the withdrawal process in stages and assumptions. From another perspective it could be "progress" or a "link".

In his essay "The Origin of the Work of Art" Heidegger states that from the great artworks it can be seen that artists use those works as a passage to eradicate themselves by all means. In other words, artwork is the first thing to represent the artist's background. I am not an absolute artist myself, but being on the edge of a true creator, by the distinctive cutaneous sensation I started to see the existence of the artist described by Heidegger.

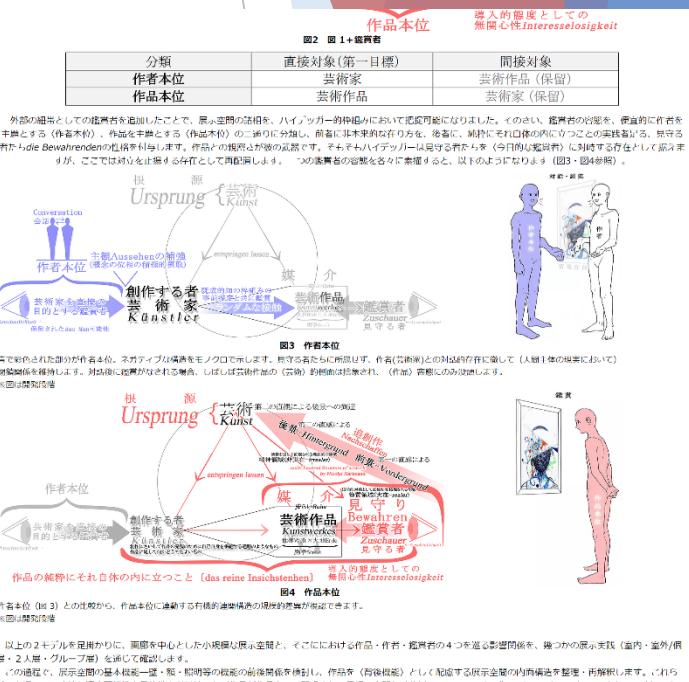
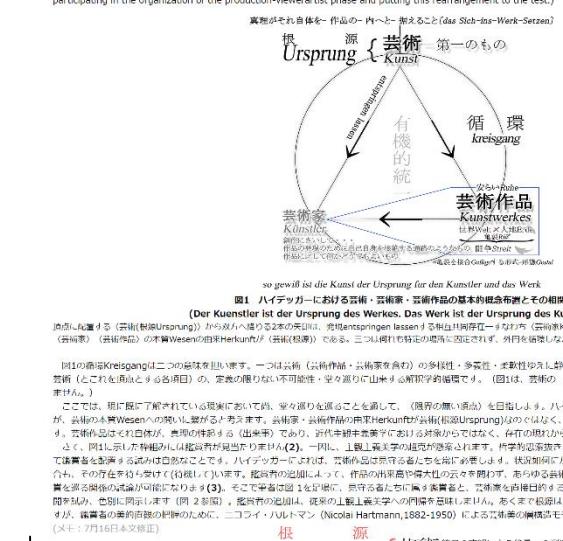
The most symbolic opportunity here is a "personal exhibition", where the artist is independent by himself and at the same time he becomes a viewer, which makes him see the significance of the exhibition. As a creator, I do not doubt the ambivalent progress by stepping over the same fundamental horizon as a viewer. In other words, I believe that by withdrawal from the already completed artwork and by the creator's independent exceptional progress, it will become a guide for bringing a light to the existence origin and striving for the unknown future. The positive isolation is my next step in accepting that.

2017年8月18日

梶谷 令
Ryo Kajitani

本個展は、多摩美術大学校友会の助成を受けて実施するものです。

Solo Exhibition was funded by Tama Art University Alumni Association grants.



個展の特設ページ開設・校友会組織の広報
(<https://www.ryokajitani.com/soloexhibition>)



- 奨学金による成果 ② 個展以降 -

② 展示・研究活動の「見える化(可視化)」の促進

研究分野

- 芸術学 / 美学・芸術諸学 /
- 芸術学 / 芸術一般 /

学歴

2016年4月 - 現在 多摩美術大学大学院 博士後期課程
2014年4月 - 2016年3月 多摩美術大学大学院 博士前期課程

ダウンロード テキストで表示

受賞

2017年12月 守谷育英会 第25回修学奨励賞 一般財団法人守谷育英会 第25回修学奨励賞

ダウンロード テキストで表示

論文

展示空間における作者・鑑賞者の相関と分類に関する試論的考察:ハイッガー著『芸術作品の根源』に基づく存在論解釈学を掛けりとして
梶谷 令
多摩美術研究 (6) 13-39 2017年6月 [査読有り]

展示空間における作者・鑑賞者の相関と分類に関する試論的考察:ハイッガー著『芸術作品の根源』に基づく存在論解釈学を掛けりとして
梶谷 令
多摩美術研究 (6) 13-39 2017年6月 [査読有り]

昨今、画廊を始めとする室内空間における展示に、作者が常駐する場合は珍しくありません。本稿は、作者の常駐が作品・鑑賞者・作者に及ぼす影響を、ハイッガーの著作『芸術作品の根源』を手がかりに、加えて展示実践を通じて確かめ、作者・鑑賞者の位相の存在論的分析を試みます。展示は、作品のみならず作者も社会的認知を得る機会であり、例えば対話が積極的に活用されますが、展示空間での対話は、展開の次第では、展示の働きそのものを形骸化させかねません。ではどうすれば、これらを相克させることなく成立させ得る...

ダウンロード テキストで表示

Works

梶谷令 初個展
梶谷 令 芸術活動 2017年8月 - 2017年8月
多摩美術大学校友会の助成を受けて、下記の日程で銀座ギャルリー志門において実施。
2018年8月21日(月)~26日(土)

ダウンロード テキストで表示

- 2018年に入ってからの取り組み -

① ►researchmap登録による研究成果の発信

<https://researchmap.jp/RyoKajitani/>

researchmap(リサーチマップ)とは...国立情報学研究所、社会共有知研究センターが提供する研究者向けのオンラインサービス

② 初個展の成果をまとめたデジタルブックの自費出版 2018年上半期内に実施

ワールドワイドウェブ

③ WWW上でのプレゼン資料の公開

2018年上半期内に実施



- 奨学金による成果 ③付随的な取り組み -

③ 展示・研究活動の「見える化(可視化)」による成果の還元

- 2018年に入ってからの取り組み -

校友会の活動理念を見据え、付随的な取り組みを実施した。
具体的には、本学校友会の第100回理事会議事録において
上田雄三先生により提案された

「校友会奨学生の略歴に「何年度校友会奨学生」と入れてもらう。」
という提案に依拠して、この度入選した「FACE2018損保ジャパン日本興亜美術賞展」のカタログ末尾「入選者略歴」欄に、校友会奨学生である旨を追記頂いた。

他

- ・新入生・卒業生への校友会活動の紹介
- ・カンボジア MirageGalleryCafeでの展示(3月25日まで実施中)
- ・チャレンジ賞受賞作品のシンガポール*での再展示(5月予定)

* Instinc Singapore Art Gallery



この度の助成に感謝し、今後とも研究に生涯を捧げることを誓います。
ご静聴ありがとうございました。

展示・研究活動や「研究の見える化」に関するご質問・お問い合わせは
itikomirugu@gmail.comまで。

